

中村ゼミの学問とその方法論

小林 敏 宏

私が中村敬先生の下で「学問」がしたいと思ったきっかけは、先生がすでに20年以上前（1982年）から「英語社会学」(the sociology of English) という英語教育 (English education) と歴史社会学 (historical sociology) が隣接する研究領域を開拓されていたということを知ったことにありました。それまでの私は大学学部時代 (ICU) や仕事（通訳）の環境の中で自らの異文化間の中で日々抱え込んでしまっていた数多くの「英語」問題をどうにか解決したいという強い願いを抱いておりました。その問題解決のための手がかりを探るべく、言語学、英語教育、社会学、心理学、政治学、歴史学関係の書籍や研究書を数多く読んでいたのですが、それらの世界がバラバラに「開示」している断片化されたパラダイムの中ではどうしてもそれらの問題そのもの自体を正確に掴み出すことさえもままならない状態でした。それでも日々仕事の合間をみながら自ら研究を続けていった末にようやく突き止めたのが日本人研究者の手による国産の「英語社会学」でした。この研究の最も魅力的な点は「英語」が現在の日本社会や一般的日本人にもたらしている数多くの問題を文化意味論や政治・社会・歴史学論的視座から立体的（学際的）に扱うために必要な新しい理論的（認識論的）枠組みを提示してくれていることでした。私は早速、先生へお手紙を書き、それまでのアマチュア・レベルの「独学」を超えて、プロフェッショナルな「学問」の“洗礼”を浴びるために中村ゼミに「入門」することになりました（聴講時代から一橋大学大学院博士課程前期時代、そして成城大学大学

院博士課程後期時代を含めた7年間に渡って、中村ゼミ門下生の1人としてその「学問」を学ぶことになりました。

本稿では私の体験をもとに、「英語と日本人」という実存的なテーマに体系的な理論構築を試みながらアタックする中村ゼミの〈学問〉とはいかなるものであったのかについて述べてみたいと思います。

学問の「身体化」¹

中村ゼミの「学問」の真骨頂を集約し一言で述べよといわれれば、私は迷わずそれは《「学問」の「身体化」》であると答えたいと思います。さらに、中村先生の「学問」観を要約するならばそれは「自己の〈存在〉から切り離された「学問」はつまるところ〈無力〉である」といえるでしょう。中村ゼミの「学問」の最大の特徴は、「自分の生き方と研究対象が深く関わっている」ところにあります。したがって、私は自分が「英語社会学」の中で研究をしていくにあたり、「どんな問題をやるにせよ、それをやらなければ生きていけないテーマを探す」²ことが何よりも重要であることを知りました。私にとって「英語」問題とは、日本で生まれ、「日本」で育ち、「日本」に生きる「日本人」である自己の言語生活環境に深く関わる大きな問題として思われました。「自分はこの「英語」という言語とこれから将来に渡ってどう付き合っていくのか」という問題の解決策を模索していくためにはどうしても避けては通れないテーマとなっていたわけです。こうして私は中村ゼミに入り先生個人の「身体感覚」から表現されるその実存主義的な「学問」の中に自らの〈生き方〉にダイレクトに結びつく「学問」の「型」を《発見》するに至りました。

中村ゼミの中で私は、これまでの「学問」によっていまだ十分に解明されないままの日本の「英語」問題に関して何かしらの答えを出していける

とすぐさま直観しました。「[日本]国内で生きる「日本人」が英語を学ぶことにはどのような意味があるのか?」「[英語]と一般的「日本人」はどのように接していけばよいのか?」「[英語]という言葉が「日本」ではどのように「表象」されているのか?それはいったい「日本人」の意識にどのように入り込んでいるのか?」「[英語]によって「日本」で引き起こされている社会的・文化的・心理的・経済的・政治的問題とはいったいどのようなものなのか?それらを解決するための最も有効な方法はいったいどのようなものなのか?」これらの問いは私個人の関心事にとどまらず学問的にもきちっとした答えを出していくことが求められている重要な課題であります。

「日本」という生きる場を「思想的拠点」とし、そこから生まれる「身体感覚(=中心感覚)」を「担保」に「英語社会」の「本質」を読み取っていくとするのが中村先生の「英語社会学」の最大の魅力でありましょう。一般的に「英語」は日本社会では実生活の「現実」の場からは非常にかけ離れた「記号」として存在し「仮想現実」を作り上げている言語でもあります。また日本の「英語教育」の領域においては、学ぶ側も教える側もそうした「仮想現実的言語」に対して「身体感覚」が希薄のままになっているという言語社会的事実があります。こうした現実の中で「英語」と「日本人」との間にどのような「距離感覚」が保たれるべきかを研究するのが「英語社会学」の重要な課題の1つでもあります³。したがって、その「英語社会学」に従事する研究者には当然、「学問」自体への「身体感覚」が要求されることとなります。事実、中村ゼミに参加する学生にとっての最重要課題の中には、「英語社会学」研究のための必要条件である「学問の身体化の方法論」を学び取ることまでが含まれていました。以下に、私個人の体験に基づきながら、その中村ゼミの「方法論(methodology)」の「性格づけ」を簡単に行なってみたいと思います。

「直観→本質」から「説明モデルの構築」へ：アブダクション（仮説法）

中村ゼミの「学問」の醍醐味 (beauty) は「本質を突く (get to the heart of the matter)」技術にある、といえるでしょう。それはまさに「学問の本道」を堂々と歩む「直観」と「論理」を用いる二刀流の「方法論」であると思います。この方法論のプロセスはゼミでは次のような流れによって実践されてきました。まず「研究」の前段回の「学習（先行研究の精査）」を基にした「研究」対象に絡む「事実」認識が行われます⁴。さらにこの「学習」によって得た「知」のプラットフォームの上において“直観”を働かせながら「研究」対象の〈本質〉に肉迫していきます⁵。そしてその「本質」を座標軸の中心点に据えながらそのイメージの〈全体像〉を「仮説」という形で表現していきます。最後にその「仮説」をデータ (facts and figures) と“論理”によって一気に炙り出していくというものです。換言すれば、それは歴史的に条件付けられた「現代」の〈社会現象〉の構造（メカニズム）を、直観→仮説→検証（演繹→帰納）というプロセスの中で「説明モデルと論理」⁶をもって「証明」する（「可視的」に説明する）技術と言うことができるでしょう。当初私の頭の中には学問の思考法といえば、自然科学においては公理・定理からスタートする演繹（ディダクション）が、社会科学ではデータからスタートする帰納（インダクション）が用いられているという程度の単純な理解にとどまっていた。それだけに私は完全に演繹で帰納でない「第三の道」をゆく中村ゼミの学問の「ゲリラ的思考法(?)」にたいへん魅了されたわけです。しかしそれは学問的には「ゲリラ的」という“奇抜”なものではなく、ハンス＝ゲオルク・ガダマーの「解釈論的 (hermeneutical)」アプローチや、C・S パースの謂う所の「アブダクション (abduction)」のような「第三の学問」⁷に位置づけられる「正統」なアプローチ（接近法）の1つであることを知るのにそれ程時間を要しません

でした。社会科学や人文科学においてこれらのアプローチを用いると、社会事象の「全体の構造（仮説）」から「部分（データ）」へと迫るので、細かい事象にいたずらに足をすくわれずに鳥瞰的視座が確保できるようになります。これは私がのちに膨大な資料を読み込み、そして論文を書いていくために最も重要なツールとなりました。

またその「本質」を突く技術には、「主張（仮説）」(a)を裏付ける「事実」(b)のリサーチにとどまらず、この2つ((a)+(b))を結び付ける論者自身の拠って立っている「論拠＝（思想、価値観、立場など）」(c)の“仮借なき検証”の作業までが含まれていました。なぜならそうした「論拠」の自己検証が、「事実」をていねいに読み解き、その上で「主張・結論（仮説）」を導き出す「直観」の「担保(ethos)」となっているからです。この「主張」「事実」「論拠」((a)+(b)+(c))をもって立論する「三角ロジック」はまさにディベートの技術そのものでした⁸。

ゼミではこのように自らの＜直観＞から議論をシステムテックに立論構築する方法を学んでいきました。そしてこの自らの「論拠」を内省し吟味するという作業が自らの「英語」問題の「本質」を突くための必要条件であったと考えています。なぜなら、それが自らの研究を「身体」から切り離さないための大前提となっているからです。日本における「英語」問題とそれを研究する個人の「思想」とはどこかしらで深く結びついている（または結びついていなければならない）わけですから、まずは自らの言語思想・態度の在り方を検証し認識していくことから取り組まなければ偏りのない説得力のある議論ができないことは当然の帰結でもありました。

テキスト解析力：「表現」するための批判的読解

先に述べたように、アブダクションによって自らの「仮説」を構築する

ためには「本質」を突く〈直観と論理〉が同時に働かなくてはなりません。そこで中村ゼミでは、「自らの〈直観と論理〉の主体を立ち上げながら」質の高い論文を読みそして書くための有効な基礎トレーニングとして、プロの研究者の質の高い論文を教材に用いたハイレベルな「批判的読解 (critical reading)」⁹ が毎回行なわれました。これは「自分自身の〈直観と論理〉のレベルをプロの研究者のレベルに引き上げるためには自分よりもレベルの高い文章を正確にそして批判的にできるだけたくさん読む訓練をしなければならない」という考えに基づいた伝統的なトレーニング方法であります。中村先生はこの「批判的読解」の狙いについて次のように述べています¹⁰。

「与えられた資料について、その主題を的確に握み、各論でその主題をどのように証明しようとしているのかを読み解く能力……そして最後に主題に対する証明は適切な資料のもとに論理的に展開されているかどうかを批評する能力を付けることである。」(1999 : 117)

これは言い換えると「マクロ (全体) からミクロ (部分) へ」というテキスト解析の基本「型」の「技化」(齊藤孝 2002 : 122-142) のことでもあります。これは、現象の中心に存在する「本質」に迫り、そこから周辺の「事実」へ接近するの技術の習得と言い換えることができます。ゼミの現場における学習ポイントを先生は、簡潔に「読解・批評・表現の3つの(主として、技術としての)言語能力」(中村 1999 : 117) という3つの段階に分けて定義しています。つまりゼミの参加者に求められていたのは、論文を書くための「仕込み作業」として、まず与えられたテキストの①主題と②各論を吟味し、その上で③批評を加えるという技術を洗練させていくことでした。ゼミ生に要求していたこの「批判的読解」の注意点について先生は次ぎのように述べています。

「①では、可能な限り修辭的表現を避けて要約することが求められる。②の各論では、主題では、主題を証明するのにどのような具体的な事実を提示しているのかを例を挙げて論ずる。③では、まず②の論証が論理的で、①を十分に証明したものになっているかどうかを論じ、その上で著者の依って立つ立場についてどう考えるかを書くことを求める。」(前掲論文：121)

中村ゼミでのテキスト読解はすべてこの「批判的読解」作業から始まっていたといつてよいでしょう。ゼミでは毎回、課題テキストの担当のセクションの「各章(部分)」ごとのポイント(main idea)と「引用」と「事実」を「主題(全体)」とどのような関係にあるかを簡潔かつ明瞭に「説明」することを求められておりました。私にとってこの技術は、まさに「表現する技術」と深く結びついていることを再認識させるものでした。そしてこの「正確にテキスト読む技術」は「正確に書き話す技術」の基礎となりました。この技術の習得に託された先生のメッセージは「語る(書く)前に正確かつ批判的に読めなくてはならない」というものであったと思っています(プロの研究者に求められている基礎能力とは、後にも先にもこのテキストの「批判的読み方」にあるといえるでしょう)。

さらに中村ゼミにおける「資料のテキスト批評」でもうひとつ重要なポイントがあります。それは「資料に「書かれているもの」だけでなく、そこに「書かれていないもの」をも読み込め」ということです。テキストに「書かれていないことは、なぜ書かれなかったのか」、それは書き手の思想の隠された「論拠(メタ言語)」になっているからか？それともそれは書き手の思想の本質に起因するものなのか？「主張」は書き手の「いかなるメタ・テキスト」から生み出されているものなのか？これらの「書かれていない部分」を深く読み込むためには、まさに読み手の「主体」の「直観と

論理」が立ち上っていなければならず、また読み手の「解釈の枠組み」が書き手の「視点」と「議論」の枠組みの偏向や限界を指摘できるだけの守備範囲の広いスコープになっていなければならないということでした。書き手がある資料（第一次・第二次）をどのような「論拠」の上で読み込んでいる（解釈している）かを正確に解説するためには、先に述べたように、読み手自身が「自らが拠って立っている論拠」を常に内省し、それに対して客観的な認識をもつことがどうしても必要になるということです。つまり、他者の「思想」の正確でバランスのとれた「批判的読解」とは、自己の「思想」の「相対的」観察によってのみ「保証」されているわけです。

このように慎重な読解を行った後、そこから得られた「知見」を「論文形式」に従って「表現」していく作業に入ります。その際に肝心な事は、曖昧な言葉遣いをなくし、日本語の文章の構造を明示的なものにし、論文全体の構造をしっかりと組み立て、「各論」を「主題」に接続させるロジック (logical thread) を全体に渡ってきちっと一本通しておかねばならない、ということでした。これは非常に「数学的（または建築学的）」な発想であり、論理の緻密な「演算処理」が学問の論述には欠かせないのだということの中村ゼミでは文字通り「体で学び取る」ことができました。また同時に、こうした技術もすべてハイレベルな論文の「批判的読解」によってのみ身に付けられるものであることを認識することができました。

私は7年間の中村ゼミにおけるこうした学問的修練によって、自らの抱えている「英語」問題の「本質」を明らかにするために必要な学問的「方法論」の「基本型（＝ツール）」はほぼ完全に「身体化」することができるようになったと思っています。今後は中村先生から学んだプロフェSSIONナル・アカデミシヤンの「独立思考 (independent thinking)」と「批判思考 (critical mind)」をフルに活かして自らの「研究」に邁進していき

いと考えています。

この場を借りまして、自らの「生き方」から切り離されていない「本物の学問」を教えてくださいました中村先生、そしてそうした中村ゼミを受講する機会を与えてくれた成城大学に心から感謝の意を表したいと思えます。本当に有り難うございました。

注

- 1 齊藤孝は『身体感覚を取り戻す』（NHK ブックス、2002 年）の中で、心と型と技の一体化された知識を「身体知」と読んでいます。中村ゼミの「学問（英語社会学）」にもやはり 1 つの「型と技」があり、知識をいかにして「身体感覚の技」とすることができるかがゼミ生にとっての大きな課題であったと思います。
- 2 阿部 謹也は『自分の中に歴史をよむ』筑摩書房（1990、130 頁）の中で恩師である上原専祿の言葉を引用しながら「それをやらなければ生きていけないテーマ」を自らの「学問」の中に見つけていく重要性を語っています。同様に、中村先生の学問に対する態度も「研究上のテーマは必ずどこかで（直接的であろうと間接的であろうと）自らの生きるの「場」の問題と深く関わっていないければならない」というものでありました。
- 3 齊藤孝（前掲書、11 頁）は現在の日本の国語教育における「身体感覚」の“復権”について論じる中で、「仮想現実が現実と混同されやすい状況が進む中で、自己の〈中心感覚〉を身体感覚として感じられることは重要な基本技である。中心感覚があることで余裕が生まれ、〈距離感覚〉をもって他者と触れ合うこともできる」と述べています。これは英語と日本人の「身体感覚」についてもまったく同じことがいえるのです。実際に、この齊藤氏の引用部の最後の「他者」という言葉を「英語」に入れ替えて読んでみれば、それは中村先生の「英語社会学」の重要なテーマの 1 つになることに我々は気づかされます。
- 4 花井等・若松篤は『論文の書き方マニュアル』（有斐閣、1997 年、26 頁）の中で「学問」における「研究」と「学習」に関する明確な区別の重要性につ

いて述べている。

- 5 前「論理」(pre-logic)としての「直観」の働きとその重要性についてはチャールズ・W・マッコイ・Jr. (2003)『なぜそれを考えつかなかったのか?』(ダイヤモンド社、186-220頁)に詳しい。
- 6 小室直樹(2003)『論理の方法—社会科学のためのモデル』東洋経済
- 7 この「第三のアプローチ」については以下文献に詳しい：上山春平・竹内均(1997)『第三世代の学問』中公新書；ブリギッテ＝シュリーベン＝ランゲ(1996)『社会言語学的方法』三元社；イマニュエル・ワーラストイン(1997)『社会科学をひらく』藤原書店
- 8 松本道弘(1989)『これがディベートのやり方だ!』中経出版
- 9 Peters, J.(1991) *The Elements of Critical Reading*. New York: Macmillan.
- 10 中村敬(1999)「基礎ゼミ」再考」成城教育第104号(116-125頁)